『噛みつき』から学ぶ

保育士の体験談より

0才児から5才児までの子どもたちが生活している保育園。各年齢、それぞれの成長模様がみられ、保育士はその成長に合わせた保育環境、援助が必要となります。

今回、私が1歳児クラスで体験した『噛みつき』を通して、自分自身が学んだこと、子どもたちの成長についてご紹介します。

ダメ！ダメだよ

お皿に食べ物のおもちゃを入れ、スプーンを持って食べる真似をし、私に振る舞ってくれていたAちゃん。そのスプーンが欲しくなり手を伸ばすBちゃん。そのとき、とられたくない一心でAちゃんはBちゃんの手に噛みついてしまいました。私はとっさのことに「ダメだよ」と、噛みついたAちゃんに感情的に声を上げ怒ってしまいました。

自分自身も小さいころに噛みつきを経験したことがありましたが、実際に保育士という立場で目の当たりにすると、どう対応すべきかわからなくなってしまいました。

このことを先輩保育士に相談したところ「噛みつきが起こったときに、最初に対応しなければいけないのは、噛まれた子」「噛みついた子には、落ち着いてからじっくり気持ちを受け止め、いけないことを伝えると良い」と、アドバイスをいただきました。

また他にも、場所のとり合いや、じゃれ合いから、目の前に友だちの体があっただけで噛みつくこともあると聞き、いろんな場面を想定しておかなければいけないと感じました。

成長過程の一つとはいえ、子どもにケガをさせることはいけないことです。保育士の把握の仕方、一人ひとりに合った保育環境を考え直す必要があると感じました。

なぜ噛みつきに？

担任同士で噛みつきの原因を考えました。私は、言葉が未発達なために「貸して」「やめて」という気持ちを言葉で言い表せないからだと思いました。

しかし、先輩保育士は『家庭との環境とは違い、同年齢のたくさんの友だちの中で、思い通りに遊べないことから、満足できていないのではないか」「眠い、お腹がすいた、かまってほしいなどの生理的欲求が満たされていないときに多いのではないか」と、子どもの立場に立ち、背景まで読み取っていました。

では、どうしたら？

【気持ちの代弁】

1歳児は、成長段階として、まだ言葉で上手く伝えられず、先に手を出し気持ちを表します。

一方的に叱るのではなく、なぜ噛みつきに至ったのかを考え「貸して欲しかったんだね」「一緒に貸してって言ってみようか」などと、伝えられないもどかしい気持ちを保育士がしっかりと受け止め、代弁していきました。

また「○○されてお友だちは痛かったよ。○○はしてはいけないことだよ」と、相手の子の思いや、してはいけないことも一緒に伝えていきました。

【行動の予測】

トラブルは少し目を離したときに、また、保育士が行動の予測ができないときに起こっていました。

子ども同士のかかわりや行動を観察し、見守り、予測してすぐに対応できるよう、担任同士、声のかけ合いを意識し合いました。

【スキンシップ】

自分の保育を振り返ると、余裕がなく「ちょっと待っててね」という言葉が多いことに気づきました。

それからは、第一に子どものことを思い、一つひとつのかかわりを大切にし、スキンシップも多くとるようにしました。心が満たされたときの子どもの心は穏やかで、人的環境がいかに大切かを学びました。

一歩ずつ

噛みつこうとする行為が、すぐになくなったわけではありません。

しかし、トラブルを通して保育士が繰り返しかかわるなかで、〝いけないこと〟〝相手とのかかわり方〟などを学んでいき、叩く、押す、噛みつくという行為が減っていきました。

また「イヤ」「貸して」「どうぞ」などの簡単な言葉でやりとりもできるようになり、友だちとのかかわりが少しずつ増えていきました。

『噛みつき』という一つの行為から、1歳児の発達を理解し、子どもの心理を読み取りながらかかわることの大切さを学びました。

友だちとのトラブルは、社会性を学んでいくうえで必要なことです。しかし、傷をつけられて帰ってきた我が子を見て、保護者の方はどのような思いをするか…そのことを常に心に留め、傷を負わせてしまった場合は、精一杯の対応をしていきたいと思いました。

また、いけないことはしっかりと伝えていき、成長していく過程で子ども自らが理解し、考える力を培えるようかかわっていきたいと思います。

足羽東保育園
米村　舞